

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第74輯

兵 主 廃 寺

二級河川春木川改修工事に伴う発掘調査報告書

1 9 9 2

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第74輯

ひょう 兵 主 さい 廃 寺

二級河川春木川改修工事に伴う発掘調査報告書

1 9 9 2

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

序 文

兵主廃寺は、岸和田市西之内町の兵主神社の境域にあります。兵主神社は、平安時代の延喜式神名帳に、和泉国の一社としてその名がみえます。現在の兵主神社が、その式内社にあてられています。古くからこの境域の一角で、中世の瓦が採集されていることから、寺院があったと考えられ、兵主廃寺の名が遺跡名として用いられてきました。

今回の調査は、神社境域の南西を流れている春木川の河川改修工事にもなっ
て行われたものです。おりしも、兵主神社境内では、社務所などの改築工事
にもなっ
て、岸和田市教育委員会による発掘調査が鋭意進められていたところ
で、さまざまな成果があげられていました。そのため当協会の調査は、岸和田
市教育委員会の全面的な協力によって行われました。

本調査を実施するにあたって、岸和田市教育委員会、大阪府教育委員会、地
元自治会をはじめとする関係者各位に多くのご支援とご協力を賜り、深く感謝
をしております。今後とも当協会の事業に変わらぬご理解とご協力をお願い申
し上げます。

平成4年3月

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

理事長 伴 恭 二

例 言

1. 本書は、二級河川春木川改修工事に伴う、兵主廃寺の発掘調査報告書である。
2. 調査は、大阪府土木部岸和田事務所の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに、財団法人大阪府埋蔵文化財協会と岸和田市教育委員会が実施した。
3. 現地における調査は、平成3年10月18日に着手し、同年12月4日に終了した。
4. 現地調査は、財団法人大阪府埋蔵文化財協会の藤田憲司と岸和田市教育委員会の虎間英喜が担当した。
5. 調査の実施にあたっては、地元西之内町会、宗教法人兵主神社をはじめ、多くの方々の協力を得た。
6. 本書に記載する平面図の位置は、国土座標系第VI系の値をkm単位で表示した。方位は座標北を示す。標高は、東京湾平均海面をm単位で+を省略して表示した。
7. 本書で用いた土壌色は、小沢正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』10版（1990）による。
8. 本書は、第I章1を藤田が担当した他は、虎間が執筆・編集した。
9. 遺物の写真撮影および焼付は、小倉 勝が担当した。

本文目次

第I章 調査の契機と経過	1
1 調査の契機	1
2 調査の方法と経過	1
第II章 兵主廃寺の環境	3
第III章 調査成果	5
1 層 序	5
2 遺 構	5
3 遺 物	6
第IV章 ま と め	10

挿 図 目 次

第1図 調査地位置図 (1/2,500)	2
第2図 周辺遺跡分布図 (1/20,000)	4
第3図 調査区平面図 (1/300)・断面図 (水平1/300・垂直1/60)	7・8
第4図 自然河川出土遺物 (1/4)	9
第5図 兵主廃寺採集遺物 (1/4)	11

図 版 目 次

図版1 調査区全景
図版2 a 調査区全景 (南から)、b 調査区全景 (東から)
図版3 a 池 (東から)、b 自然河川土層断面
図版4 a 自然河川 (西から)、b 自然河川 (東から)
図版5 a 自然河川出土遺物、b 自然河川出土遺物
図版6 自然河川出土遺物

第 I 章 調査の契機と経過

1 調査の契機

兵主廃寺は、岸和田市西之内町に所在する。現地には兵主神社が、広い社叢をとどめて建っている。大阪府文化財分布図ではこの兵主神社境内とほぼ重なるように、約100m四方の範囲が兵主廃寺に想定されている。「兵主神社」は、延喜式に登場する和泉国の式内社である。中世末まで文献資料にめぐまれないものの、近世初頭まで遡ることができる現在の兵主神社が、その社に当てられている。この神社境内で、平安時代から中世にかけての瓦が点々と出土することが知られていたことから、埋蔵文化財としては兵主廃寺と呼ばれてきたが、その詳細は決して明らかでなかった。

現在、兵主神社の南西部を画するように、春木川が流れ、その北西付近で大きく蛇行している。泉州地域の河川は降雨後の増水が著しく、甚だしい下刻と氾濫が繰り返されてきたことは、これまでの文化財調査などでも指摘されている。兵主神社の境域を画する現春木川が寺域あるいは社域とどの様な関係にあるのかは、兵主廃寺あるいは、式内社としての兵主神社の姿を明らかにするためには大きな関心事である。

春木川の河川改修事業は、平成3年度、関西国際空港建設に関連してその整備計画の一環として実施されたものである。大阪府教育委員会と大阪府土木部の協議の結果、改修工事に先立つ文化財調査を財団法人大阪府埋蔵文化財協会が担当することとなり、岸和田土木事務所と当大阪府埋蔵文化財協会は平成3年9月、委託契約を交わした。

ちょうどこの時期、兵主神社境内では社務所の建て替え等の整備に関連して、岸和田市教育委員会による発掘調査が進められていた。本協会の発掘調査が市教育委員会の調査と合前後して行われたこともあって、現地調査および整理について、岸和田市教育委員会から、全面的な理解と協力を得ることになった。

2 調査の方法と経過

発掘調査は、まず重機による掘削を行った。(10月18日)重機による掘削は、調査着手前に当調査地の北側に昭和初期まで池が存在したこと、また兵主神社参道として1m近く

の整地が行われていること等の情報が得られていたため、表土層及びその整地層を対象に行った。

機械掘削終了後、国土座標法による新平面直角座標系を基本として、4 m×4 mの区画を設定した。

その後、人力掘削に着手した。(10月29日)掘削は土層の堆積状況を観察しながら層ごとの掘削を行った。そして遺構の検出できた面上において、遺構の精査を行った。また北側に存在した池に関しては、表土層除去の時点において検出が可能となったが、他の遺構と同じレベルまで掘り下げて検出している。

遺構検出後、遺構の掘削を行った。(11月7日)その際に随時、平面図や断面図等を作成した。出土した遺物は先の区画ごとに取り上げた。

遺構の掘削終了後、ヘリコプターによる航空測量を実施し、1/20と1/100の測量図を作成した。(12月2日)

測量終了後、必要に応じ遺構の断ち割りをを行い、調査を終了した。(12月4日)



第1図 調査地位置図

第II章 兵主廃寺の環境

兵主廃寺は岸和田市西之内町に所在する。岸和田市は大阪府南部に位置し、北は大阪湾に面し、南は和歌山県と接している。府県境には和泉山脈が東西に延び、山脈から丘陵状の地形が北麓に張り出す。また多くの河川が派生し、北西方向に流れ、大小様々な谷地形が開析されており、開析谷やその北部前面には河岸段丘が形成されている。

兵主廃寺も神於山(296m)から派生した春木川(上流域では轟川)の右岸に位置している。標高はおよそ10.0~10.5mを測る。

兵主廃寺は西之内町所在の兵主神社に比定されている。兵主神社は、延喜式(967年施行)にその名がみられ、いわゆる延喜式内社の一つとされている。その境内から平安時代から鎌倉時代にかけての瓦が採集されたことから、神宮寺的な寺跡の存在が考えられている。現在の兵主神社の境内は、長辺120m、短辺90mの長方形を呈し、西側を春木川に接している。

兵主廃寺(1)の周辺は、山間部を除く岸和田市域の中にあっては比較的遺跡が少ない地域である。それは春木川の氾濫源にあっているためと考えられる。しかし、いくつかの遺跡は確認されている。次にそれらの遺跡について簡単に述べておきたい。

旧石器・縄紋時代の遺跡は知られていない。しかし後述する栄の池遺跡(9)において、有舌尖頭器や局部磨製石器等の遺物が若干量出土している。

弥生時代の遺跡としては、加守三昧山遺跡(6)と栄の池遺跡があげられる。加守三昧山遺跡は西方およそ800mの地点に所在する。明確な遺構は検出されていないが、多量の弥生時代前期の遺物が出土している。付近に当概期の集落の存在が推測される。栄の池遺跡は春木川のおよそ500m上流の右岸に位置している。この遺跡からは竪穴式住居4棟や方形周溝墓等が検出されている。遺物は中期前葉から後期にかけてのものが認められるが、中期中葉から中期後葉にかけてのものが最も多い。高床式住居(倉庫)を線刻した絵画紋土器も出土している。これらの他に、平安時代の掘立柱建物10数棟や井戸等も検出されている。

古墳時代の集落跡は知られていないが、栄の池遺跡において須恵器や埴輪が出土している。また、礼拝塚古墳からは金環や須恵器の出土が伝えられている。

奈良時代以降の集落跡は少ないが、寺院跡は多く、小松里廃寺(10)、春木廃寺(4)と来迎寺

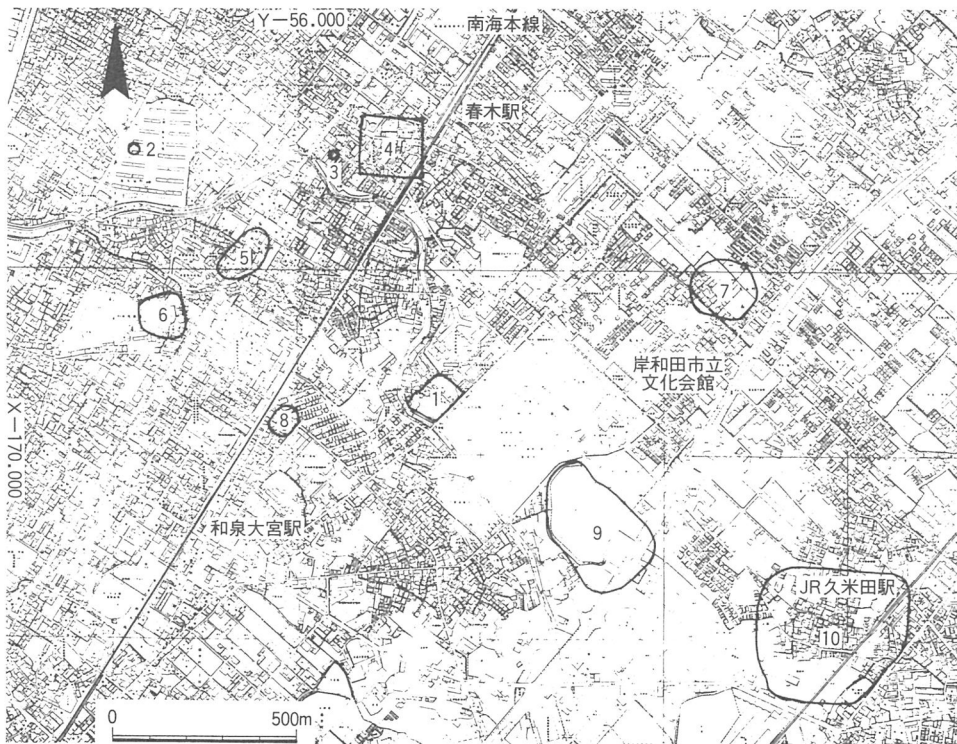
跡(8)などがあげられる。いずれも瓦の出土が認められるだけで、実体は不明である。小松里廃寺はJR久米田駅の西側に位置している。飛鳥時代にまで遡る可能性をもった瓦が出土している。春木廃寺は南海春木駅の西側に位置している。奈良時代前半の瓦が採集されている。付近に当寺院の瓦を生産した瓦窯跡(3)が存在したとされている。来迎寺跡は西方およそ400mの地点に所在する。平安時代から鎌倉時代にかけての瓦が採集されている。

参考文献

岸和田市 1979. 『岸和田市史』第1巻

岸和田市遺跡調査会 1979. 3 『栄の池遺跡』

岸和田市教育委員会 1981. 3 『岸和田の文化財 写真集Ⅴ』(市内出土瓦)



- | | | | |
|---------|-----------|-----------|--------|
| 1 兵主廃寺 | 2 礼拝塚古墳 | 3 春木廃寺瓦窯跡 | 4 春木廃寺 |
| 5 穴口廃寺 | 6 加守三味山遺跡 | 7 荒木土塁 | 8 来迎寺跡 |
| 9 栄の池遺跡 | 10 小松里廃寺 | | |

第2図 周辺遺跡分布図 (1/20,000)

第Ⅲ章 調査成果

1 層 序

調査地は、兵主神社の参道として使われていた。地表面は南側で8.9m、北側で8.2mとやや北に向かい低くなっている。

調査区の東西壁面で土層の観察を行ったが、各地点毎にかなり異なった堆積状況が認められた。ここでは基本的な堆積状況を示すと思われる箇所の堆積をとりあげて、基本層序としたい。

基本層序は大きく3層からなる。

I層は盛土層である。地表面下には0.6~1.2mの盛土が行われていた。兵主神社境内は北側の道路面よりおよそ1m低く、そのため参道は盛土を行い、緩やかな勾配をとっている。無遺物層である。

II層は旧耕土層である。およそ0.6~0.8mの堆積である。中・近世の遺物を若干量伴う。

III層は地山もしくは地山を削って流れた自然流路の埋土である。ここで地山としたものは黄褐色系の粘質土層で、地山面上には自然流路の埋土が厚さ0.3~0.4m堆積していた。自然流路は、この地山面上に堆積した埋土を除去したのちに検出した。自然流路の埋土は礫もしくは砂である。

2 遺 構

池（第3図、図版3）

調査区の北側で昭和の初期まで存在したとされる池の一部を検出した。径およそ18mの不整形円形を呈するとみられる。I層の盛土層上面から切り込まれている。深さ2.5mを測る。底には厚さおよそ0.3~0.4mのヘドロ状の堆積物が認められたが、その他は埋め立てによる整地層であった。堆積物中には昭和初期頃の日常食器の他、さまざまな生活用具が廃棄されていた。

自然河川（第3図、図版3・4）

調査区を縦断するかたちで自然河川の一部を検出した。かつての春木川で、現在の流域より東におよそ10mずれている。一部で右岸を検出したが、左岸は検出できず川幅は不明、

川底も検出できなかった。埋土は礫を含んだ砂層からなる。

遺物はおもに上層部より検出した。中・下層部からはほとんど遺物を検出できなかった。また埋土中には植物遺体もあまりみられなかった。

遺物は各時期のものが混在していた。また比較的摩滅は認められない。

3 遺物 (第4図、図版5・6)

以下の遺物は全て自然河川出土である。

1は二重口縁壺の口縁部である。復元口径、13.4cmを測る。頸部は外反し直立する口縁部を接合する。接合部外面に断面三角形の凸帯が巡る。口縁部は内面に若干肥厚する。

2は甕の口縁部である。復元口径、19.8cmを測る。口縁部は「く」字状に屈曲する。

3は高杯の脚部である。内面に絞り痕と工具によるケズリ痕が認められる。

4は瓦器碗の底部である。復元底径3.6cmを測る。高台は低く約1mmを測る。内外面の調整は不明である。

5は瓦質羽釜である。復元口径21.2cmを測る。口縁部は内傾し、断面は4段の段状を呈する。外面にヘラケズリ、内面にハケ調整が認められる。

6は瓦質羽釜である。5と比べ大型である。口縁部は若干立ち上がり、断面は3段の段状を呈する。

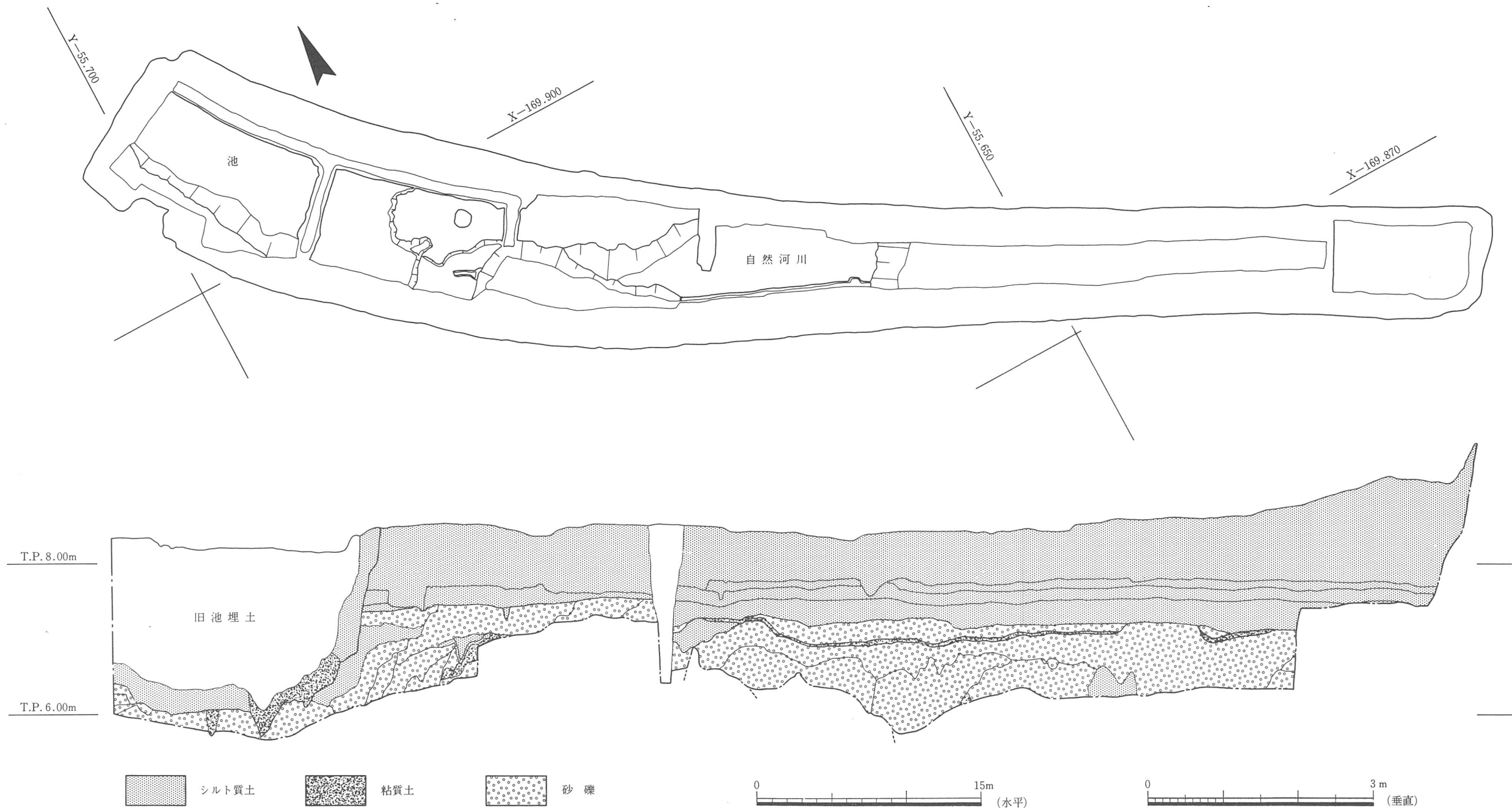
7は平瓦である。凹面は布目圧痕(7本/cm)が、凸面に細い縄タタキの痕跡が認められる。側面にはヘラケズリの痕跡が認められる。

8は平瓦である。凹面に布目圧痕(8本/cm)が、凸面に太い縄タタキの痕跡が認められる。

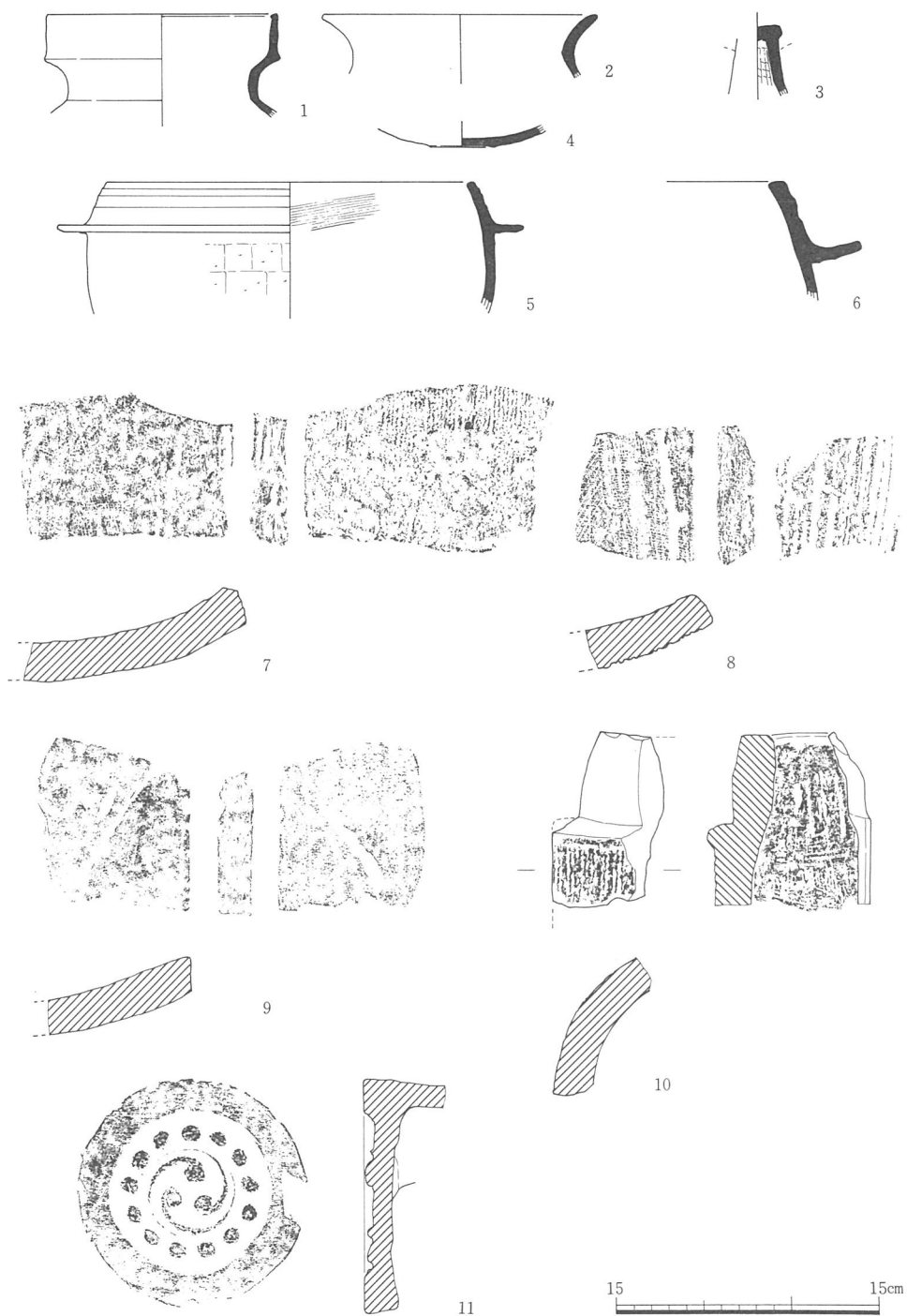
9は平瓦である。凹面は布目圧痕(およそ10本/cm)をナデ消そうとした痕が認められる。凸面には細かな砂粒の付着が認められる。

10は丸瓦である。凸面に縄タタキの痕跡が認められる。

11は軒丸瓦である。径13.6cm。内区に比較的尾の長い右向きの巴紋を配し、外区に扁平な珠紋を13個配する。圏線は認められない。



第3図 調査区平面図 (1/300)・断面図 (水平1/300・垂直1/60)



第4図 自然河川出土遺物 (1/4)

第Ⅳ章 ま と め

今回の調査では、兵主廃寺の寺院としての施設跡を検出することはできなかった。また数点の瓦を検出したものの寺院跡としては非常に微量である。そこでこれまでに岸和田市教育委員会が、兵主神社境内で採集した遺物や発掘調査の成果をごく簡単に紹介し、まとめにかえたい。

そもそも兵主神社は、延喜式神名帳の和泉国和泉郡二十八座二十一社の中にその名が認められ、現在の兵主神社が、それに比定されている。そしてその兵主神社の境内においてしばしば鎌倉時代から室町時代にかけての瓦が採集されたことから、神宮寺の寺院の存在が考えられてきた。しかし実体は不明であった。

昭和51年に拝殿の改築工事が行われた。その際に、軒平瓦をはじめ平瓦や丸瓦等が土器とともに出土した。その多くは江戸時代のものであったが、なかに鎌倉時代から室町時代にかけての瓦が数点含まれていた。

平成3年には境内で6箇所の発掘調査を実施した。その結果、近・現代に広範囲にわたる掘削や盛土が行われていたことが判明した。それとともに拝殿の北西部で、時期は不明であるが微砂やシルト質土の堆積が認められた。整地層とみられる。その整地層上面の一部に、火を受けたとみられる箇所があった。また地形は境内の北側で、春木川が東に大きく蛇行する方向に向かい急激に落ち込んでいることもわかった。しかしいずれの箇所においても、古代寺院や神社に結びつくような遺構、遺物は検出できていない。

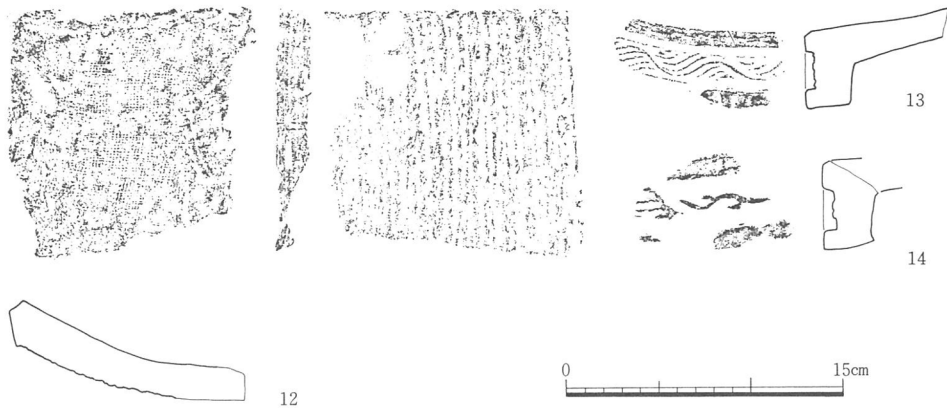
これまでに得られた遺物には、鎌倉時代から室町時代にかけての瓦が含まれているものの、平安時代にまで遡るものは確認されていない。そしてその量も非常にわずかである。

以上がこれまでに得られた、兵主廃寺（兵主神社）に関する考古学的知見である。一方文献的には、兵主神社の名は、延喜式以降しばらく文献からみられなくなる。そして次に文献に登場するのは中世末から近世の初頭になってからである。そして天正年間に、付近一帯は豊臣秀吉の根来攻めの際に焼き尽くされたという。

また、現在の本殿は創建時期の詳細は不明であるが、室町時代の特色をよく伝えるものとして国の重要文化財に指定されている。

このように兵主廃寺（兵主神社）は、考古学的にも文献的にも不明な点が多く、今後の調査の進展に負うところが大きい遺跡である。そこでいま述べることができるのは、延喜

式がまとめられた平安時代に瓦を葺いた建物が付近に存在したかは不明であることと、これまでに得られた鎌倉時代から室町時代にかけての瓦が後に持ち込まれたものでない限り、当該期には付近に瓦を葺いた建物が存在した可能性が高いことである。そして出土する瓦の量がわずかであることから、小規模な建物や屋根の一部に瓦を用いた建物などが想像される。



第5図 兵主廃寺採集遺物

版 圖



調査区全景



a. 調査区全景 (南から)



b. 調査区全景 (東から)



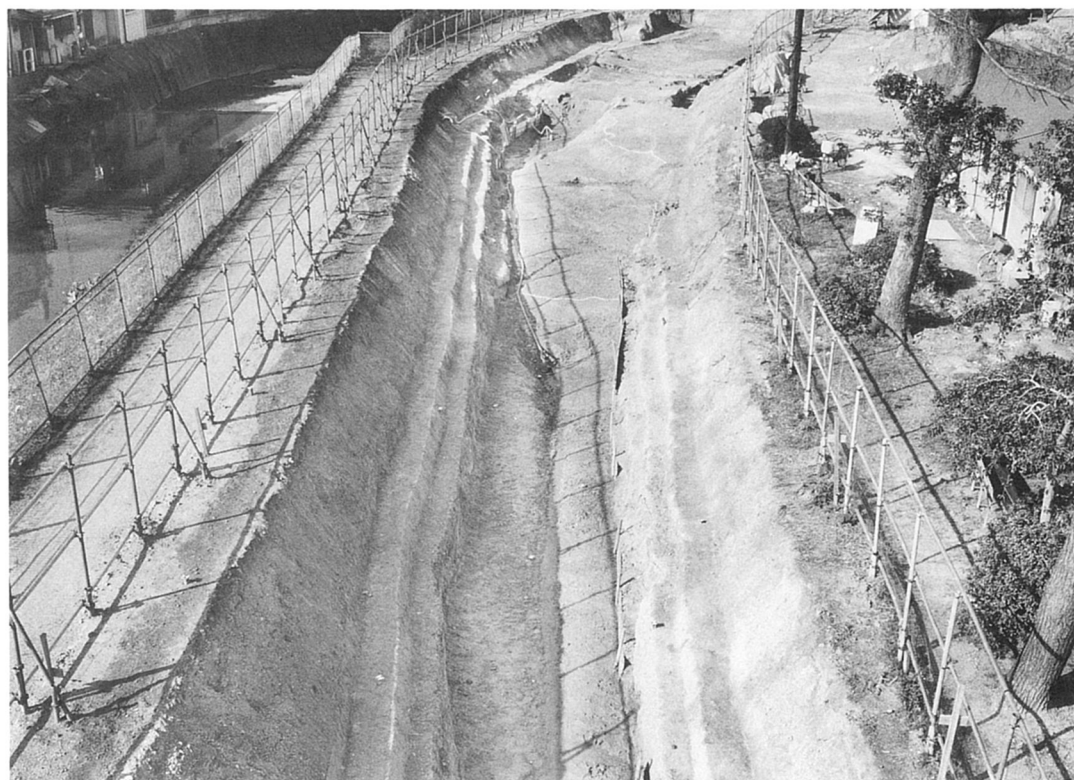
a . 池（東から）



b . 自然河川土層断面



a. 自然河川（西から）



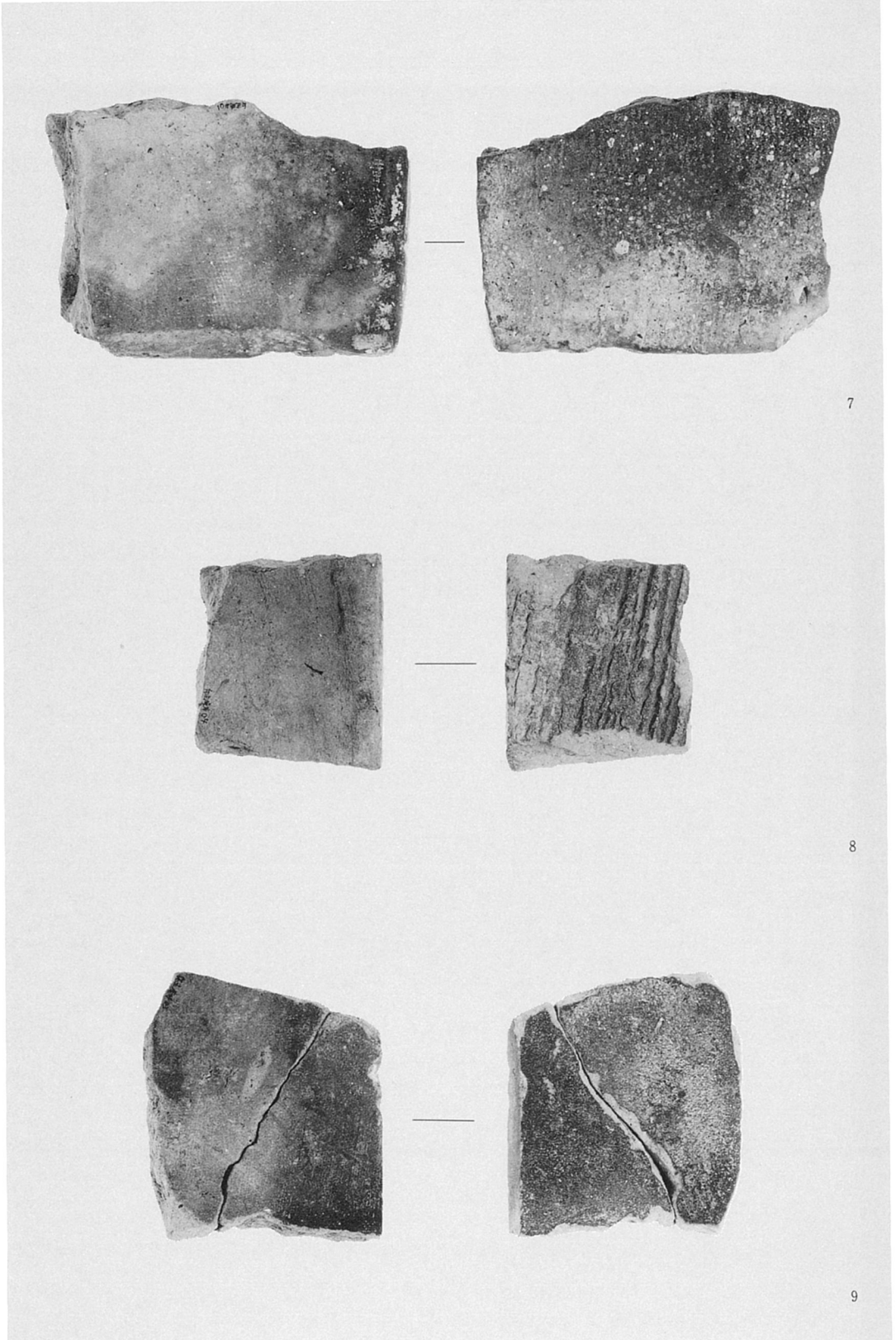
b. 自然河川（東から）



a . 自然河川出土遺物



b . 自然河川出土遺物



7

8

9

自然河川出土遺物

(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第74輯

兵主廃寺

二級河川春木川改修工事に伴う発掘調査報告書

平成4年3月31日発行

編集・発行 財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

大阪府中央区谷町2丁目2番20号 大手前ウサミビル

印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

